ローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会　日本支部発行

LCJE ニュース 241

2019.11

一部 ￥200

2019.11.01発行

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10　VIP関西センター3F
TEL. 072-867-6721　FAX. 072-867-6721
Eメール　lcjejapan@hotmail.com
ホームページ　LCJEJAPAN.com

郵便振替 LCJE日本支部・00950-4-25633

P2▶3
投稿　佐野 剛史
P4▶5
トロント国際大会報告　石井 秀和
P6
シオンとの架け橋　石井田 直二
P7
アルコイリス・ミニストリー　早川 衛
P8
1Pの続き
お知らせ　事務局より

巻頭言
ブルックリンのユダヤ居住区

ライフ・イン・メサイヤ日本委員　LCJE ニュース編集長　石黒 イサク

今夏トロント国際会議の帰路、二日間でしたがニューヨークのブルックリンにある、ライフ・イン・メサイヤの活動拠点である“インマヌエル・ハウス”を訪問する機会を得ました。その場所はユダヤ居住区に隣接していて、私たちのスタッフのみならず、全米各地から、また世界の各地から、直接ユダヤ人伝道を実践する人たち、見学する人たちが入れ替わり立ち替わり訪れ、豊かに用いられています。スタッフが常駐していますので、もしブルックリンでの伝道を見学したい方、参加したい方がありましたら、ぜひお知らせください。

今回の訪問は私にとって、長年の夢が叶った感動と新しいチャレンジを受けた時となりました。去る九月の報告会の時に大阪で少しお話ししましたが、この紙面でより多くの方々にお伝えしたいと思います。

私は土曜日の安息日には、チョーズンピープル・ミニストリーズ・センターで、メシアニック・ジューのシャバット・サービス（安息日礼拝）に出席しました。翌日曜日にはスタッフ家族が通っている教会の日曜礼拝に出席しました。日曜日の午後、スタッフのピーターと共に、ユダヤ人居住区にある“コーシャー寿司屋”に行って昼食を食べました。そのあたりには二軒の寿司屋がありましたが、すべての食品がラビによって検閲されて、合格証を受けていないと営業ができないと聞きました。

オランダ人のピーターは時々この店で食事をしていて、一度日本人である私に品物と味の評価をさせたいと言って、店員に話しかけました。写真を見ての通り、日本の寿司とはかなり違う寿司でした。握っていた板前も中国人、味や内容もカリフォルニア・ロールのようなモノや、チーズやオニオンリング、アボカドを入れたり、私たち日本人から見れば、あまり寿司らしくないメニューがほとんどです。ちなみに海苔巻きはすべて海苔の外側にご飯が巻いてあるのです。

しばらくしてキッパを被って立派な髭をたくわえた正統派のユダヤ人のおじさんが入って来て、寿司を注文しました。私は彼がどんな食べ方をするのか興味があったので、ちらちらと観察していました。彼は寿司を受け取ると、カウンターにあるドレッシングをドバッーとその上にかけ、つぎに醤油をまたその上にかけ、ワサビとガリを少し乗せ

8P へ続く▶

現代の使徒運動について知っておくべきこと

LCJE日本支部運営委員　佐野 剛史

先月号の巻頭言で、米国アッセンブリー教団に異端宣告を受けた「後の雨運動」との関連で、新使徒的宗教改革（NAR）には警戒が必要であることを説いた。ただし、それだけではなく、現代の使徒運動については「使徒」というタイトル（肩書き）を使うこと自体にも警戒が必要であることを指摘したい。さらに、NARの「使徒」の中に、使徒のタイトルを利用して異端的な教えを広めている人々がいることにも注意を呼びかけたい。

■使徒の権威

使徒というタイトルを使うかどうかは、単なる呼称の問題ではない。聖書では、使徒に絶大な権威が与えられている。そのため、使徒の権威を記した聖書箇所を悪用し、教会に異端的教えや権威主義的な教会統治がもたらされる可能性がある。実際に、キリスト教会には、使徒の権威を主張する人々によって異端的な教えや権威主義的な教会統治がもたらされてきた歴史がある（モルモン教、カトリック教会など）。ペンテコステ派の神学者であるビンソン・サイナン（1934年～。歴史家、神学者。リージェント大学神学部教授）は、著書の中で次のように語っている。

「私は初めから、教会内で至高の権威を抑制なく行使する使徒職の回復を主張する運動には警戒をしていた。その権威が乱用される危険性があまりにも大きいからである。教会史を通して、教会に使徒職を回復しようとする試みは何度もあったが、異端に走ったり、大きな災いをもたらしたりする結果になることが多かった」[1]

サイナンが言うように、聖書が教える使徒の権威は絶大で、権威が乱用される危険性があまりにも大きい。誰かを使徒と認めることは、「異端に走ったり、大きな災いをもたらしたりする」可能性があるため、後々大きな影響を及ぼすことを十分に理解しておく必要がある。

聖書に記された使徒の権威

新約聖書には、使徒に与えられた権威がいくつか記されているが、ここではその一部を紹介する。読者の中には、現代の使徒と呼ばれる人々が以下に紹介するような権威を主張しているわけではないと言われる方がいるかもしれない。しかし、問題は、聖書が語っていることなので、誰が何を言っていたとしても、聖書の言葉は否定できないという点にある。そのため、今は使徒の権威を主張していない人でも、いったん使徒と認められたら、次のような聖書箇所を根拠にして使徒の権威を主張し始めることがあると考えた方がよい。誰かを使徒と認めることにはそれだけの危険が伴うということである。

（1）神の言葉を正確に語る

以下は、イエスが最後の晩餐の時に十二使徒に語った言葉である。

26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。（ヨハネ14：26）
13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。（ヨハネ16：13）

上記は、使徒たちは聖霊によってすべてのことを教えられ、イエスが話したことをすべて思い出し、すべての真理に導き入れられるという約束である。この約束があるために、使徒たちが教えたことが聖書（新約聖書）となることができた。

（2）使徒の言葉が聖書となる

次の箇所は使徒ペテロの言葉である。

15 …私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。 16 その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。（2ペテロ3：15～16）

ここで、ペテロはパウロの書いた手紙を「聖書」とみなしている。実際に、使徒の書簡は新約聖書となった。その背景には、「神の言葉を正確に語る」というイエスの約束があったのは先述のとおりである。多くの現代の使徒は、初代教会の使徒は大文字の使徒（Apostle）で、自分たちは小文字の使徒（apostle）であり、聖書を書く権威は持っていないと言う。しかし、聖書自体にそのような区別が書かれているわけではない。そのため、ある人を使徒と認めることは、聖書と同等の権威を持つ言葉を語る者として認めてしまう可能性があると常に考えておいたほうがよい。

（3）主の命令を語る

次は使徒パウロの言葉である。

13 …あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。
（1テサロニケ2：13）

初代教会の信者は、使徒パウロの語る言葉を神のことばとして受け入れた。実際に、使徒にはキリストの教えを正確

に教えるという約束が与えられており、パウロの書いた書簡は新約聖書の一部となるのだから、当然のことである。

37 自分を預言者、あるいは、御霊の人と思う者は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。
38 もしそれを認めないなら、その人は認められません。
（1コリ 14：37）

使徒パウロは、自分の言うことを主の命令であると認めない者は、主の働き人として認められないと語っている。この言葉は正真正銘の使徒であるパウロが語るのでよいが、偽使徒が語ると目も当てられないことになる。中世にヤン・フスなどの聖職者が教皇の命令に反した結果、カトリック教会から破門され、迫害された史実を思い出してほしい。

42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。（使徒 2：42）

使徒の時代、使徒たちの教えが新約聖書となるので、ここで言われていることは当然で、今の私たちが聖書の教えを堅く守るのと同じである。しかし、現代の使徒の中に、この聖書箇所を利用して、聖書にはない自分の教えを守るように教える人物がいる。米国ベテル教会の「使徒」、ビル・ジョンソンである。

■現代の使徒に見る使徒の権威の濫用

ここで現代の使徒の例としてビル・ジョンソンを取り上げるのは、過去に二度来日して日本でもよく知られ、Jesus Culture というバンドを通して若者に大きな影響力を持つ人物だからである。しかし、使徒の権威を利用して誤った教えを教えているのはジョンソンだけではないことを指摘しておきたい。ジョンソンは決して NAR の極端な例ではない。

以下にジョンソンの教えを紹介する。

（1）聖書ではなく、使徒に従う

ジョンソンは、先ほど挙げた使徒 2：42 を引き合いに出して、次のように語っている。

「初代教会が力強く、健全であり続けることができた要因の一つは、使徒の教えを堅く守り続けたことである（使徒 2：42 参照）。しかしここで気付くのは、聖書は、重要な教理を公に記録し、これを信じるというリストを挙げるようなことは一切していないということである。この『使徒の教え』とは、信条の列挙ではない何か別のものを指していると言ってよい」[2]

ジョンソンはそのようにほのめかした後、ここで言う「使徒の教え」とは、その時々の使徒の教えであり、今は現代の使徒の教えであると語る。

「使徒たちは、教会と地上における神の目的について青写真を心の中に持っている。それによって、教会に新たな啓示がもたらされるのである」

つまり、今の時代にあっては、聖書よりも、現代の使徒の「心の中」にある神の計画、新しい啓示に従うことが必要だと語っていることになる。

（2）イエスは神性を捨てた

ジョンソンは、イエスは地上生涯では神であることを捨て、完全な人として生きたと教えている。

「イエスは、主の御名によって不可能な領域を侵略するというチャレンジを受け取ったすべての人々が従うべきモデルとなった。イエスは、神としてではなく、神と正しい関係にある人として、奇跡と不思議、しるしを行ったのである」
「イエスは、人としての制限を持って地上生涯を生きた。イエスは、御父から与えられた使命を全うしようとする中で、神であることを捨てたのである（ピリピ 2：5 ～ 7 参照）」[3]

上記のジョンソンの教えはピリピ 2：7 の「ケノーシス（無にする）」という言葉を曲解したもので、地上生涯の間という一時的なものではあっても、イエスの神性を否定し、三位一体を否定する異端的教えである。この教えが間違っていることは、コロサイ 1：19、2：9 などを見れば明らかである。

（3）病を許容する福音は「ほかの福音」

ジョンソンは、ベテル教会のメッセージで、病を許容する神学はパウロが言う「ほかの福音」（ガラテヤ 1:7）であり、偽の福音であると語っている。

「イエスの公生涯は、苦しみや痛みを抱えたすべての人に対応しました。主は彼らに仕えました。従うべき基準はこれだけです。私は、病を許容する神学を拒否します。…パウロは肉体のとげについて述べています。従来これは多くの人によって、病のことだと解釈されてきました。神がそれを許容し、神がもたらしたのだと。これは『ほかの福音』です」[4]

これは半生を通して病と共に生きた作家の三浦綾子や、病床にある多くのクリスチャンの信仰を否定する言葉である。罪と罪に対する刑罰から救うイエスの福音を、聖書が約束していない病のいやしにすり替えるジョンソンの教えこそ、パウロが言う「ほかの福音」である。

結論

以上で、誰かを使徒として認めるということは重大な結果を伴う決断だということ、使徒の権威が濫用されると教会は破壊的なダメージを受けることを見た。特に、聖書にはない「ほかの福音」を広め、聖書が教える本当の救いから人々を閉め出してしまう「使徒」に警戒する必要がある。

1.Vinson Synan, An Eyewitness Remembers the Century of the Holy Spirit (Chosen Books, 2010), P.183
（出典：John MacArthur, Strange Fire）
2.Bill Johnson, Apostolic Teams - a Group of People Who Carry the Family Mission
(http://www.elijahlist.com/words/display_word/7083)
3.Bill Johnson, When Heaven Invades Earth Expanded Edition (Destiny Image, Inc.), Kindle 版
4. ビル・ジョンソンのベテル教会での礼拝メッセージ（2010 年 8 月 15 日）。引用・参考：ダビデの日記（http://psalm8934.livedoor.blog）

LCJE 第11回 国際大会参加レポート

サンライズ杉戸教会副牧師　石井 秀和

今年8月11～16日にカナダのトロントで開催されたLCJE第11回国際大会に、石黒イサク先生と共にLCJE日本支部を代表して参加する特権を頂きましたことを心より感謝いたします。

■ユダヤ人伝道を通じて「新しい一人の人」が形成

▲マイケル・ブラウン師

今回の国際大会には16か国から200名を超す参加がありました。参加者の所属団体には、210年の歴史をもつ英国の団体をはじめ、177年（英国）、175年（ノルウェー）、134年（デンマーク）、132年（米国）、125年（米国）といった長い歴史をもつユダヤ人伝道団体が多数あり、欧米のクリスチャンによるユダヤ人伝道の歴史の重みを感じさせられました。また、メシアニック・ジューの参加者が、筆者が予想したより多いと感じました。おそらく全体の半数近くはメシアニック・ジューだったのではないかと思います。

▲新会長のダン・セレド師（右）が、会長の役目を終えたトゥビヤ・ザレツキー師夫妻のために祈る

今回の参加者については、次のことが、注目すべき画期的なこととして話題になっていました。メシアニック・ジュー会衆連合（UMJC：1979年設立。ユダヤ人のアイデンティティーを重視）の事務局長が参加しメッセージを

▲ウェイン・ウィルクス師

語ったこと、メシアニック・ジュー運動の新聞社「メシアニック・タイムズ」のスタッフたちが参加し、同社がLCJEに加盟したこと、アフリカのナイジェリアから初めて参加があったこと、そして、アジアからの参加者が増えたことです。このことは、おそらく今までどちらかというと欧米の異邦人クリスチャンのものという色合いが濃かったLCJEに、メシアニック・ジューと非欧米人クリスチャンの参画が増し加わりつつあることを意味していると思います。講師たちのメッセージの主題には特になっていませんでしたが、ユダヤ人への伝道という明確な目的を通じて「新しい一人の人」（エペソ2:15）の形成が今世界で進行していることを感じました。また、今回の大会声明（前号3ページに掲載）にはメシアニック・ジューたちの考え方が良い意味で色濃く反映されているのではないかと思いました。

■テーマは「Making All Things New」

今回のテーマは「Making All Things New」（すべてを新しくする／黙示録21:5）。このテーマの下、各晩に講

▲筆者（左）とスモール・グループのメンバーたち。うち4名はメシアニック・ジュー

▲ダレル・ボック師

師たちが「新たな召命」「新たなビジョン」「新たな世代」「新たなパートナーシップ」「新たな献身と情熱」の各メッセージを語り、筆者を含め参加者たちはユダヤ人伝道への思いを新たにさせられました。

▲国際コーディネーターに三選されたジム・メルニック師夫妻

この他にも様々なトピックのメッセージや分科会がありましたが、講師たちの中には、来日奉仕の経験等により日本の教会にもある程度広く知られている先生方が多数いました。マイケル・ブラウン師（『教会が犯したユダヤ人迫害の真実』著者、ペンサコーラ・リバイバルで活躍）、ジョナサン・バーニス師（旧ソ連諸国でのユダヤ人伝道で活躍）、ウェイン・ウィルクス師（JPFカンファレンス2019講師）、ダレル・ボック師（ルカの福音書の注解書で著名）らです。

▲北米地区コーディネーターに就任したジム・シブリー博士（左）

▲国際大会会場の全景

ブラウン師は、正統派ユダヤ教徒への自身の伝道の取り組みを語りましたが、大会直前の８月８日に著名な正統派ラビと「新約聖書は反ユダヤ的か?」というテーマで公開討論を行っていたこともあって、大きな注目を集めていました。

▲ジョナサン・バーニス師

■ユダヤ人伝道の働き人の繋がりを大切に

大会期間中は、全参加者が10名程度のスモール・グループに振り分けられ、毎日同じテーブルを囲んでメッセージの感想を分かち合ったり聖書（コロサイ書）の学びをしたりして、親交を深める機会が与えられました。大会ではLCJEの新会長の選挙も行われ、イスラエルの若手メシアニック・ジュー指導者ダン・セレド師（ジューズ・フォー・ジーザス所属）が新会長に選出されました。閉会メッセージでは、それまで会長を務めてきたトゥビヤ・ザレツキー師が、「LCJEは放っておいてもいつもあると思うな。実際1975年には、当時あったユダヤ人伝道のネットワークが、ある論争で崩壊してなくなってしまった」等と語り、LCJEの維持・発展への努力を参加者に訴えました。筆者は、そのメッセージから、また今回の大会参加を通じ、今あるユダヤ人伝道の働き人の繋がりを大切にして、それが発展していくために用いられたいという思いを強くしました。

イスラエルの重要性を学ぶ(4) 祭司の民イスラエル

シオンとの架け橋 石井田 直二

聖書研究会で行われた12回シリーズの学び「イスラエルの重要性を学ぶ」から、LCJE機関誌向けにリライトしてご紹介しています。今回の聖書箇所は出エジプト記19：4－6です。

カインとアベルの物語は、聖書の冒頭に登場する印象的な物語です。これを読んで、多くの人々は「カインのようにならず、アベルのようになるにはどうすればよいか」と考えます。でも、視点を切り替えてみましょう。アベルのささげものは、なぜアダム一家全体に対して有効でなかったのでしょうか。

■善人は周囲の人々に無益？

ノアの洪水以前、何万人という数の人が生まれましたが、その中で神に良い評価をいただいたのは、アベル、エノク、ノアのたった3人でした。確かに、これらの人々がいたことで神の創造は完全な失敗を免れたのですが、彼らがいたことは周囲の人にとって益になりませんでした。早い話、アベルがいたばっかりに、カインは殺人の罪を犯すことになってしまったのです。

人間は団結すると**「もはや何事もとどめ得ない」（創世記 11:6）**ほどの力があります。この、恐るべき力は、たいてい神に逆らう方向に用いられるのですが、この力を神のために用いる仕組みが、アブラハム契約だったとも言えます。神は、天の星のようにアブラハムの子孫を増やし、その民族をご計画のために用いようとされたのです。

彼の子孫をエジプトで増やした後、神は今日の朗読箇所に書かれたように、イスラエルを「祭司の王国」にすると宣言されました。人間のほとんど全てが罪人でも、神と人とを仲介できる祭司が一人でもいれば、多くの人が祝福されます。アベルがもしも祭司だったなら、アダム一家は彼のささげた犠牲によって罪の贖いを受けることが出来たでしょう。

少数の義人が、多くの人を義とするという、この新原理こそが、アブラハム契約の核心であり、その実現のための道筋が出エジプト記 19 章で初めて明かされたのです。

■祭司の道は厳しい

しかし、ここで示された「祭司の王国」という新しいパラダイムは、あまりに厳しすぎました。イスラエルの民全体が祭司なのですが、神はさらにその中でレビ人と祭司を選び、それを通じて祭司とは何かを民に示されました。神は十二部族の中からレビ族を取って（民数記 3:11）御自分のものとされ、その中からさらにアロンの子孫だけを祭司として選び、さらにその中で大祭司を選ばれました。祭司は人に祝福を与える栄誉ある仕事（民数記 6:23-）ですが、それは非常に危険な任務です。初代の大祭司アロンには4人の子がいましたが、ナダブとアビフは儀式の規定に従わなかったので殺されました。さらに、祭司になれなかった人々が祭司をねたむという問題も深刻でした。レビ族のコラたちは、250 人の賛同者を集めて、祭司になることを要求したのです。この人々はみな焼き殺され、コラ、ダタン、アビラムの一族は地に呑まれました（民数記 16 章 ,26:10-11）。しかし、これらの大惨事は、後に「祭司の王国」であるイスラエルがたどる苦難の歴史の「予告編」に過ぎなかったのです。

神はイスラエル民族を聖別し、契約を守るように求められた（双務契約）のですが、イスラエルは結局、神の求めた基準に達することができませんでした。そこで神はエレミヤ 31:31 で、新しい契約（これは片務契約）を用意されたのです。

■新約の祭司である私たち

さて、新約は旧約（アブラハム契約）の更新だと考えがちですが、エレミヤ 31:31 やヘブル 9:18 にあるように、これはシナイ契約（イスラエルを祭司とする契約）の更新です。ですから、新約によって救われた私たちは、イスラエルと共に「祭司」に加えられる（Ⅰペテロ 2:9）のです。そう考えた時、信仰の目的が、私たち自身の完成のためではなく、他の人々のためであることが見えて来ます。レビ記16章などにあるように、祭司は自分と自分の家族のために贖いを済ませないと、他の人々の贖いができません。だから、私たちは他の人よりも先に清められたのです。

イスラエルの祭司制度は、本当に罪を取り除くことができなかった（ヘブル 10:4）のですが、私たちには真の大祭司キリストがおられます。イスラエルは**「わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたこと」（出エジプト 19:4）**を証言するのですが、私たち異邦人クリスチャンは**「暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざ」（Ⅰペテロ 2:9）**を語り伝えなければなりません。神の大いなる御業を見せられた者は、それをまずユダヤ人に、そして異邦人にも語り伝える使命があるのです。

イスラエルにねたみを起こさせる神の方法は変わってしまったのか？

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表　早川 衛

２ヶ月ほど前、アルゼンチンから来日されたホルヘ・レデスマ師とそのチームの働きに関わる機会を得た。彼らは、Invasion del amor de Dios と呼ばれる伝道プログラムを推進している。同プログラム名を直訳するなら「神の愛の侵入」となる。これは 2008 年に５つの教会によってスタートしたものであるが、現在では、世界 54 ヵ国、3,600 の教会に拡大している。その特徴は、世界中で同時期に、それぞれの街へ出て行き伝道を行なうこと、そして、その中で起こされる神の超自然的なしるしと不思議の現れである。

1492 年、スペインは、キリスト教に改宗しないユダヤ人を国外に追放した。追放されたユダヤ人の渡航先のひとつが南米であった。このような歴史に翻弄された彼らの子孫であるユダヤ人が、現在もアルゼンチンにいる。その数は、約 183,000 人（Berman Jewish Data Bank, World Jewish Population 2015）である。これは、全世界のユダヤ人口の 1.3%であり、居住国別順位では世界７位、中南米諸国では第１位である。アルゼンチンと言えば、1980 年代以降、教会の爆発的な成長や、その働きのために用いられた伝道師カルロス・アナコンディア師などを連想するキリスト者も多いはずだ。今回、上記のレデスマ師とそのチームの働きに関わり、同国には、リバイバルの炎が脈々と流れていることを知った。また、同国に居住するユダヤ人は、そのようなキリスト教会の働きをどのように感じているだろう、と考えさせられた。

先月の LCJE ニュースの第５頁に、石井田師の興味深いレポートがある。そこには、観光客として来日するユダヤ人の数に関し「来年には約５万人に達する勢い（日本政府観光局調べ）です。これは、ユダヤ人伝道団体が本格的な伝道活動を行なっている世界の諸地域に匹敵する数なのです。」とあった。すなわち、日本という国は、ユダヤ人に直接伝道できる地となっているのだ。日本にいるキリスト者は、ユダヤ人のためには、祈りと献金しかできない、という考え方から、直接伝道ができる、という考え方にシフトすべきなのだ。

それでは、どのようにユダヤ人に伝道すべきなのか。また、ユダヤ人の救いのために何が必要なのか。ユダヤ人の救いのためには、ローマ人への手紙 11 章 11 ～ 14 節に書かれているとおり、ユダヤ人にねたみが引き起こされる必要がある。この原則は変わらない。なぜなら、それが、変わったとも、変わるものだとも聖書は教えていないからだ。

使徒たちの伝道の働きをとおしてユダヤ人にねたみが引き起こされた実例が、聖書に記されている。使徒の働き 13 章 13 節～ 14 章 7 節や同 17 章 1 ～ 5 節等である。これらの箇所から確認できるのは、ユダヤ人と異邦人の両者に対し、同時に、同一のメッセージ、すなわち、イスラエルの神とイエス・キリストによる救いが語られた時、ユダヤ人にねたみが起こされた、ということである。そして、これらの伝道の働きに携ったパウロは、自らの伝道について「私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」（コリント人への手紙第一 2 章 4 節）と定義している。筆者の質問は、今もこの方法が有効であるのか、である。聖書は、何と言っているのか。聖書は、この方法が変わるものである、とは教えていない。事実、世界の至る所で、パウロのことばのとおり伝道に励むキリスト者がおり、多くの実が結ばれている。これが現実である。上記レデスマ師による伝道の働きも説得力のある人間の知恵のことばではなく、御霊と御力の現れによるものである。アルゼンチンには、この働きを見て、ねたみに駆られるユダヤ人がいるはずだ。そして、イエスをキリストであると信じ、救われるユダヤ人がいるはずだ。筆者は、これらのことに関する調査を行ないたいと考えている。確かな根拠に基づく結果が分かれば、報告させていただきたい。

多くのキリスト者は「聖書をすべて信じる」と言う。しかし、すべてを行なっている訳ではない。神のみことばを巡る戦いは、確かにあるのだが、すべてを信じる、と言うキリスト者は、すべてを行なってみるキリスト者ではないだろうか。少なくとも、聖書を人間の理性に合わせ現代に、この方法は、有効でない」などと言うべきではないと思料する。

使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行なわれた際、サドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。今日、これと同様のことが世界各地で起こっている。サドカイ派の者たちは、復活はない、と言っていた。そんな彼らにイエスは何と言ったのか。「あなたがたは聖書も神の力も知らないので、思い違いをしています。」であった。イスラエルの神とそのことばとは、時代が変わっても決して変わらない。聖書と神の力を知りたい、そして、思い違いをしたくない、と筆者は思う。

◀ 1P からの続き

ました。そして箸をわしづかみにして、それらをかき回して、箸を巻き寿司に突き刺すようにして食べ始めました。彼がお金を払った、彼の寿司なので、どんな食べ方をしても良いのですが、私は心の中で、「それは寿司の食べ方やないで、おっさん」と叫んでいました。

“コーシャー寿司”を食べながら、私はラビ的ユダヤ教について考えました。まさに彼らの寿司や食べ方のように、神のみことばである“トーラ＝聖書”を、彼らは自分流にアレンジして、自分の好きなように味つけし、清浄認定をして満足しているのです。それはあくまで自己満足のレベルであって、到底きよい神様の御前で受け入れられる“義”には到達できません。

『神は凡ての人の救われて、眞理を悟るに至らんことを欲したまう。』（テモテ前書 2:4）

神様は彼らの好きなやり方では無くて、眞理を知って欲しい、自己流では無い本物の救いを、メシアであるイェシュアを受けとって欲しいと願っておられるのですから。

ジューヨークとも揶揄されるニューヨークの中でも、ブルックリン地区は特にユダヤ人口が多く、訪問者は思わず「ここはイスラエルなのか?」と感じるぐらいです。言葉もイデッシュかヘブル語が飛び交い、英語も話さない人たちも多いと聞かされて驚きでした。建物にも特徴があり、仮庵のスッカを作るために高層アパートでも、ベランダを必ず設けていることや、多くのユダヤ規定が一帯を支配していることを肌で感じました。インマヌエル・ハウスの図書室には、「ブルックリンに触れたら、世界に触れる」という大きな標語が掲げてあります。今日も彼らユダヤ人の救いのために祈り、励んでいきたいと願っています。

LCJE

LCJE日本支部事務局レター

LCJE は、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJE として支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断してくださいますよう、お願いいたします。

2019/2020年度祈祷会予定

場　所	12月	1月	2月	会　場
大阪（6:30より）	12日	9日	13日	北浜スクエア（VIP関西センター8F）
東京（1:30より）	14日	11日	8日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈り会にご参加される方へ】第二木曜日午後６時半開始です。
【東京祈り会にご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈り会の会場は、811号室ですが、変更される場合があります。
階下の掲示板をご覧になってご参加ください。

LCJE日本支部2019年9月度会計

収入・献金		支出・現金	
科　目	金　額	科　目	金　額
献　金	156,000	事　務　費	12,800
大阪祈り会席上献金	30,000	NEWSレター製作費	50,120
		郵　送　費	40,000
		郵便振替手数料	4,600
		通　信　費	5,500
		賃借・管理費	22,000
		高熱費・共益費	9,870
		交　通　旅　費	7,000
		祈り会経費	14,000
		国際大会出席費	177,295
合　計	186,000	合　計	336,785
		差　引　残　高	-150,785
前月よりの繰越	174,218	翌月への繰越	23,433

事務局よりのお知らせ

LCJE 日本支部では、皆様からの御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は 2000 文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、**LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM** 又は **FAX 072-867-6721** まで。宜しくお願い致します。

編集後記

19 号台風で甚大な被害にあわれました地域の皆様の上に主の励ましと、勇気、平安がありますように。心よりお見舞い申し上げます。世界中が落ち着かない年末を迎えることになり、クリスチャンはより一層主の期待されていることに最善を尽くす 2019 年の仕上げになりそうです。今月もイスラエルの政治、中東の情勢を覚えて祈りくださいますように。トロントでの国際会議の祝福と恵の記事にも主よりの励ましを受けます。大切なご労苦を担ってくださいました石井師・石黒師に感謝します。引き続きまだ主とお出会いしてないユダヤ人には一日も早く主とお出会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。心注いでイスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカーお一人お一人に主の祝福がありますように。シャローム

LCJE日本支部事務局長　高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝